

会 議 議 事 録

会議の 名 称	生命倫理委員会	日 時	平成24年6月21日(木)17:00~17:30
		場 所	大 会 議 室
出席者	委員長：森村統括診療部長 委 員：柳田診療部長、内炭救急部長、岩井看護部長、 藤谷外部委員、久保田外部委員 (書記)庶務係長		
議 題 及 び 討 議 事 項			
<p>【多発性硬化症における宿主因子に関する遺伝学的研究】</p> <p>受付番号：24-4 頁数：1頁～13頁 (申請者：診療部長 田中 正美)</p> <p>申請者説明：多発性硬化症は再発と寛解を反復する中枢神経の炎症性疾患である。日本において近年発症数の急激な増加が示されており、特定疾患受給件数も1万を超えてきている。</p> <p>これまでに一卵性双生児で一方が多発性硬化症である場合、もう一方が多発性硬化症を発症する割合は25-30%と、二卵性双生児の場合の3-5%と比べて有意に高いとする報告や、両親が共に多発性硬化症である子供の多発性硬化症の発症リスクは約30%で、片親のみが多発性硬化症の子供のリスクが約3%であるのに比べて有意に高いとの報告があり、単一遺伝子疾患ではないが、何らかの遺伝的要因の関与が示唆されており、遺伝的要因を検討する事は非常に重要な事とされている。</p> <p>九州大学では、平成16年4月より、倫理委員会承認後、多発性硬化症と血小板活性化因子受容体およびHLAの関連について遺伝学的研究を行ない、血小板活性化因子受容体のミスセンス変異がMSの疾患感受性に影響を与えていること、HLA-DRB1アレルが多発性硬化症のMRI画像上の特徴と関連があることを明らかにした。</p> <p>近年、国際共同研究ネットワークであるInternational Multiple Sclerosis Genetics Consortium (IMSGC) が設立され、全ゲノム連鎖解析等により、次々と新しい知見が得られつつある。多発性硬化症には人種差があり、日本人の多発性硬化症は視神経脊髄型の比率が高く、脳病巣が少ないなど欧米白人とは異なる特徴を有している。そこで、我々はSouth Japan Multiple Sclerosis Genetics Consortium (SJMSGC)を立ち上げ、多数例の日本人多発性硬化症患者DNAを用いて国際共同研究を行うことで、MSに影響する遺伝的背景の人種差を明らかにすることを検討している。本研究成果により、病態や人種差に基づいた画期的な治療法の開発に繋げることが期待される。</p> <p>審査内容： ・P11の説明書の最初の段落からは多発性硬化症が遺伝するかのよう記載されているが、遺伝子を解析されることに抵抗があるのでは。</p>			

→なりやすいということであって遺伝するということではない。発症原因を調べるために遺伝子を調べるということ。

- ・この段落の文章を削除したほうが分かりやすいのでは。

→訂正

・将来、未知の遺伝子解析の研究のために採血した血液の保存を予定しているとあるが、どのように個人情報保護されるのか。

→データは匿名化され、悪用はできないようになっている。

・同意書にて遺伝子試料を保存することを同意しませんでしたと選択した場合は、本当に保存されずに廃棄されるのか。

→九州大学・IMSGC等のガイドラインに従って廃棄しているはずである。

- ・そのことを説明書に明記したほうがよいのでは。

→訂正

審査結果：説明書・同意書訂正のうえ、承認